

人間の本性と現代の悲劇

カール・メニンジャー

(メニンジャー精神医学研究所長
およびカンサス医大教授)

わたしは、諸国家間の暴力の行使に代わるべき方式の研究に関する米国防レンド奉仕団の謙遜にして大胆なる提案を読む機会を与えられた。

『権力に真理を語れ』の主張は、端的にいうと、わたしの理解するかぎりでは、われわれが文化ならびに個人と国家の安全に関する期待を軍事的な計画に依存させるならば、われわれ自身の破滅を招来し、ひいては全世界の不幸をもたらす、ということである。われわれは、幾度となく敵を心配させ、奮起させ、そのことのために精力を消耗し、宗教的信念の基本的原理に違反し、そして究極的にわれわれ自身の破滅を招く、というわけである。

その内容は、わたしの心に非常に生々しくよみがえるいろいろな実例にすこしもふれていない。現代史におけるごく新しい出来事であるわれわれの百五十年間にわたるアメリカ・インディアンに対する圧制と搾取、広島市民の大量殺りく、美しいドレスデン市の不必要な破壊、などのことに言及していない。それは、われわれのどう慢という罪について述べもしなければ、われわれの昨日・今日の栄華と繁栄のすべてが明日には「ニネベとチルスのそれ」と同じような運命をたどるようになるかも知れないということを教えてくれようともしていない。

クエーカー派の人びと、およびその小冊子の執筆者たちは、あたかもわれわれが破壊から創造へと目を転ずるのかのごとくに考えているらしい。かれらは、あたかもわれわれが、思想や表現の促進、弱小国家

に対する強力な技術的・経済的援助のための技術や資源の提供、などのために大いに努力するのかのごとく考えているらしい。われわれは、ばく大な量の備蓄食料を利用して、世界の全人口の半分以上を占めている空腹な人びとを助けることができるというわけである。

わたしがこの提案をどう考えるかということ、『プログレッシブ』誌の編集者は知りたがっている。とすれば、わたしはもちろんこの提案には大賛成だといえる。一介の知識人たるわたしには、この計画に賛成する以上のことはなにもできそうにない。楽隊は陽気で愉快な曲をかなで、人びとは意気揚々と他の人類を滅亡させるためにつくられた武器をたずさえながら行進しているという光景以上におそろしい光景がまたとありうるであろうか。

皮肉にもわれわれは、一方ではすべてが心からの平和主義者であり、将来の戦争様式におそれおののき、平和の幸福とよろこびを求めておりながら、他方ではすべてが好戦主義者であるといった現状にある。誰かがわれわれに攻撃をしなければ、ただちに戦争が勃発するわけである。それでわれわれは、他人がしかけようとする戦争に備えて、つねに防衛準備のために狂奔させられている。「他人」は絶えることなしである。

われわれの政府がきわめて高度な破壊力をもつ軍事兵器を保有せんとする表面的な理由は、われわれに大へん都合の悪い存在と考えられているソ連国内にいる同じ人間同士のある特定のグループの悪意に求められている。だが、かれらの悪意がわれわれ自身の考えおよびぬほ

どのものであるはずはなく、またわれわれの善意がかれらにとうていおよびもつかぬものであるというようなことも考えられない。なぜなら、かれらも同じく人間であつて、人間のふるまいというものにそう差があるものではないということは、すでに科学的に十分に究明されつくしているところの事実である。

同じ市民同士の間、悪質な個人攻撃とか大げさな邪推というものは、自己の破滅、国家の破滅、さらには世界の破滅、というものをみちびき出す重要な要素たりうるわけである。われわれの側の見解によると、それらの現象は、ソ連共産主義の指導者たちの精神病的症状にあてはまるものとされている。だが、それらは、多くの米国人や南阿人たちの精神病的症状にもあてはめられるわけである。これらの米国人や南阿人がいだいている有色人種との接触とか提携・協力に対する恐怖心というのは、ヒステリーの発作以上にひどいものである。この恐怖心こそは、あきらかに誇大もう想と名づくべき代物である。

われわれは、誰でもクエーカー派の正しさを知っている。われわれは、クエーカー派の人びとをはじめ、イエス、予言者ミカ、第二イザヤ、ゾロアスター、ガンジー、孔子、プラトン、ソクラテスなどの正しさを、知性というものによつて判断することができる。ところが、フロイトの説によると、この知性の声はきわめて低く、弱々しいものである。それは、恐怖の叫び声に圧倒されてしまう。それは、絶望の声によつてかき消されてしまう。それは、恥辱の声によつて否定される。それは、憎悪によつて制止され、怒りによつて沈黙させられてしまう。世界はあまりにも大きく、われわれの知らないことがあまりにも多すぎる。

しかしながらフロイトは、以上のことにつけ加えて、知性の声は持続的であるといっている。その特質は、永遠的であることにある。騒ぎや叫びは永くつづかず、船長や国王の寿命は有限である。大国という大国は、思想よりも鋼鉄を高く評価してきた。おそらくそれは、われわれの世界が若く、われわれの文明が未熟であつたがためである。だが、いまやわれわれは、十分に成長し、より賢明になつてい

はずである。人類の直面する大問題とは、われわれ人間がみずからの侵略と自己破滅の本能を克服しうるか否かということである、とフロイトはいっている。

いまや人間は、全人類を容易に絶滅させるような自然力の使用を抑制する能力をもちうる段階に達している。だが、フロイトは、それに加えるに他のもう一つの「至上力」があるといっている。それは、ギリシアの愛の神なる永遠のエロスが、人間の永遠の悪魔に対応して、人間を生存させるような力を発揮するということである。フロイトはこれを「希望」と呼んではないが、われわれはいまだにこれに期待をかけている現状である。

フロイトの言は、けつして詩とか宗教のたぐいではなくて、科学的な理論に立脚したものである。だが、精神病学者というものは、その職業柄、愛という言葉が無難作に用いる科学者ばかりである。愛は、精神病の治療の規準をなしている。精神病学者たちは、愛をばくみ育てることによつて憎悪の念を克服することが可能であり、このことによつて病気をなおすことができるということを宗教的なまでに熱烈に信じているわけである。かれらは、連日このことが患者におよぼす影響を観察しているわけである。ところが、この精神病学者たちの仕事の大半は、すでに絶望へと追いやられた人びとを相手としたものである。それにくらべて、牧師とかジャーナリストたちは、より冷静にして健全な精神状態にある思慮深い人びとから成り立っている多くの会衆とか読者を相手としていいる。かくてかれらは、イスラエルの予言者のごとくに起ち上れる立場にあり、われわれに希望と方向を与えてくれる。だがかれらは、憎悪こそが敵であつて、けつして特定の国が敵ではないということ、すなわち、たんに共産主義者のみならずわれわれすべてが破壊的であるということ、そして世界の希望は真の愛であつて核エネルギーではないということ、をはつきりと理解してはじめてそのことがなしうるのである。クエーカー派の人びとがその勇敢なる提案をとおして主張していることが以上の事柄であるとするならば、まことに幸いである。